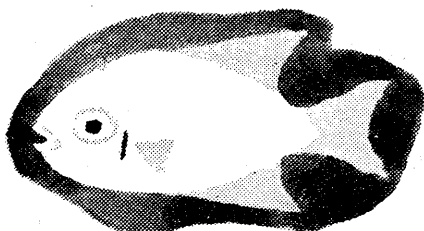


米国における学校教育の反省

— 門外漢の観察と所感 —

北
川
台
輔



Niwako

先づ最初に、今日アメリカの教育界でしきりに問題となっている「学校と社会」との関係について私自身の観察した所を延べてみよう。

元来凡ゆるの意味に於て、個人主義的な傾向の強いアメリカでは、児童の教育に關しても個性を尊重することを特徴としていたと言え

るのであるが、近年に到つてどうもそれだけでは甚だ一方的に片寄つた結果になることを認めざるを得なくなつたのである。というのは学理的にでなく極めて平凡な實際的な言い方をすれば先づ次のようなことである。即ち幼児の持つて生れた個性を伸ばすという原則で教育にあたる場合、往々にして「幼児の自然にしたがふことは之をドンドンやらせ、氣の向かないことは之を強いてさせない」という極端に走り易い傾向がある。教育とは外から色々なものを詰め込むのではなく、また無形の材料を一定の型にはめて十人一樣に仕上げられるものでもなく、十人十色個々人の持つて生れた個性を引き出し伸ばして、その最大張度まで成長せしめることにあるという理論で以て右のやうな、極端に言えば「仕たいことだけをしたい時にしてしたくないことは絶対にしないで済む」というやうな片寄つた自由主義が、進歩的教育の看板にかくれて相當に根強く教育界に影響して来たように思われる。

所がその結果を見ると、或意味では個性を伸ばし、持つて生れた天分を充分に發揮して夫々に専門家として大を為すに到る人物が現れて来たことは事實であるが、それと同時に余りにも多くの人々がどの道に於ても大した物にならないばかりか、国家の一員又世界の市民の一人としてまことに物足りない存在でしかないことに目を被ることが出来なくなつて来たのである。之を今少し具体的に述べる

と、例えば最近までアメリカの多くの大学で、医学部には黒人やその他の有色人種或はユダヤ教徒を全然入れなかつたり、また入れて

もその数を極端に制限したりする傾向があったのであるが、その表向きの理由は黒人その他は折角立派な医者になつても、患者が来て呉れなければそれっきりだから、一般に白人が理屈はともかく人種的偏見に支配されている限り、長年の労を重ねても無駄である。だからその方面に材能があつても、卒業してからくやむことのないように、最初から異つた方面に進むように忠告するといふのである。

所がそれは一般の白人が黒人やその他の人種に対して偏見を持っているといふことを不可避の事実とし、その前提の上に立つての苦しい言いわけであることは常識のあるものにはすぐわかるのである。而してこれが非常に深刻な問題であるのは、このような大学側の態度が黒人その他に対して不当なものであるからばかりでなく、実はそれが教育そのものの意味も、理想もそれをその根底からくつがえしたにも等しい悲劇であるからなのである。

第一に人種と宗教の如何を問わず幼児の持つて生れた個性と天分とを伸ばすといふ教育の理想が実現されていないのみか却つて蹂躪されている。

第二に個性に重きを措くと言つてい乍ら、人をその属する人種、民族宗教などによつて判断し、彼は白人なるが故に此の途にすすんでもよいが、之は黒人なるが故にそれが出来ないといふと決定してしまうことは個性尊重の原理に正反對の行き方である。

第三に右のような人種的偏見によつて折角天与の材能を伸ばすことが出来ない人々が幾百千人とあるとすれば、それはその人々個々

人の損失であるばかりでなく、結局は国家のそして引いては全人類の損失である。

第四に、斯く冷静に考えてみれば人種を理由として差別待遇することの愚かはずぐにわかるのであるが、而もそれを世界での最高文明を誇るアメリカの、更にその中でも最も賢明なるべき最高学府の方針の中に、そうしたことが憶面もなく実行されているといふのはどうしたことであろうか。一体誰がそのような原則や方針を樹立するものであるうか。言うまでもなくそれは大学当局であり、大学教育を受け、世に名を成した人々ばかりの寄り集りである。そのような人々が何故あのように片よつた物の見方しか出来ないのであろうか。結局識者の間に、之までの大学教育は専門の技術や知識は教えるが、人をつくるという点では未だ未だ足りない所があるのではなにかといふことが反省せられるようになって来たのである。

この角度からの観察を今少しすすめてみると、大学当局を支配する人達は「自分達は勿論人種的偏見に捕われてはいないし、学生各々の才能を伸ばすことに大賛成ではあるが、一般社会がまだまだそこまで行つていないから、折角卒業はしたものの有色人種なるが故に、就職も出来ないといふことになつたのでは、却つて気の毒だからそのような悲劇を未然に防ぐことこそ我々の責任であるといふように答えるのであるが、それならば大学とは所詮は無知なる一般大衆の偏見を是正するのではなく、唯それに迎合し、追従して行くだ

けのものであろうかということになる。大学が世の迷盲を啓発して幾百年來の悪習を破り、真理の光のもとに正義の道を歩み得るよう一般を啓蒙指導することを以てその使命とせず、却つて世の支配を受けその圧迫のもとに屈従しなければその存在すらあやぶまれるというのであれば、折角の専門技術も學理もまことに何の為のものだかわからなくなつてしまふ。

私は今ここでアメリカの人種問題そのものを取り上げているのではなく、唯それを一つの窓として、それを通して「学校と社会」の問題の実相を眺めようとしているのである。上述した所で既に明らかのように、学校——下は幼稚園から上は大学院に到るまで——は社会と絶縁状態では存立し得ないものなのであるが、従来はともすれば学校を実社会から余りにも切り離して考え、学生時代を以て人生の何か特殊な期間、本當に生きているのではなく生きている為の支度をしているに過ぎない時代、であるというように考える傾きがあったことは之を否むことが出来ない。その結果学校で教師達が目的とする所を、父兄を始め一般社会は全く理解せず、また理解しようともせず、学校の教育方針と家庭での訓育方針との間に全く矛盾撞着が絶えなかつたり、学校の教育を担当する先生達と、学校を維持経営する理事達との間に少しも意志の疏通意見の一致を見ないというようなことも亦少なからずあったものである。

右のような状態のもとに一番迷惑をするのは被教育者に他ならない。例えば現今四十年代から六十年代の年令期にあるアメリカ人、即ち

社会の有ゆる方面でアメリカを牛耳っている人々は、その幼少の頃から大体三つの大きな影響のもとに成人した人々である。その第一は熱心な信仰者であるとないつとに拘らず二十世紀初頭に成長の過渡期にあつた人々は、何らかの意味で神を敬い、人を愛することを以て人倫の道であるということをも、アメリカ文明の底に流れる伝統の中から汲みとるようにして教え込まれて来たのである。第二に彼らは近代的教育を受けて、真理の探究と真理への服従を以て、知識人文化人の歩む途であることを教えられて来た。天來の個性を尊び之を活用し、何かに於て衆に秀でた専門家として人類の福祉に貢献することがその若い魂にやきつけられた幻であり理想であつたのである。併し乍ら第三に社会人となつた彼らを指導した精神は成功への一筋途であつたと言つてよいであらう。自分の腕に物を言わせて他人よりも一歩抜ん出ることによって生存競争に勝利を得るといふこと、而してそれが産業文明商工業文明、技術文明のアメリカで、一切がドルによつてその価値を評価される限り、宗教の教える人倫の道も、学校の教える真理探究の道も、経済的な成功者とならんが為の競争によつてかき消されるが如くにおきざりにされてしまふ傾向を持つたのである。だから立派な教養もあり學識もある紳士淑女達、日曜日毎に教会に出席して神を礼拝することを怠らず、遠隔未開の土人間に伝道する為には幾何の献金を惜しまない敬虔なる人々が、同じ米国民の幾割かをその人種の故に、皮膚の色故に、或は又宗教の故に、正當なる経済界の競争場裡から除外しようとい

うようなことを敢てするようになったのである。一たびそうしようということになれば理窟はどうにでもつくものだ。だが根本的な理由は世智辛い経済戦線に一人でも競争に参加する相手の少ない方が自分の勝ち目が多いということにあることを忘れることは出来ない。

或人々が白人は白人種なるが故に優等なるものであると主張するのは右のような理由による。それは併し乍ら現代の科学の光に照らして見る時には、全く根拠のない迷論であり亦迷信である。であるが故に、こうした信念？を一般社会人の心に植えつける為には、個性の尊重とは正反対の「全体主義的」なイデオロギーを捻出しなければならなくなつたのである。白人はどんな愚劣なもの不道徳なもの悪人であっても唯白人なるが故に、如何なる黒人よりも優れたものであるとし、黒人は黒人なるが故に如何に秀でた学者政治家であっても社会的には白人と対等に扱われ得ないものとして、頭から決めてかかつて、白人でも黒人でもこの独断論に反抗して行動するものは之を排撃してやまないというような、ヒットラーも顔負けしそうな徒輩が出現して来たのである。而して最も悲しむべき事實は米国の識者が、このような半精神病的な連中の言う所を敢て反駁せず、反つて彼らの声にひきずられるかの如く、有色人種に属する人々の個性を尊重し、彼らを一介の人間として人間らしく交際することを何か知ら後ろめたことのようにさえ感ぜしめられて来たということである。こうしたことが事實である以上、折角個性

尊重の教育も、いつの間にか附和雷同の愚民を大量生産したことにしかならず「デモクラシー」の代りに「デマゴグリー」の出現となり、真理と正義とが社会を統治支配する代りに、小さな政治家屋と之を操つる不逞の徒が良民を煽動して「多数決」の看板にかくれて自己の私利私欲を満たして行くという状態が出現せざるを得なくなるのである。事ここに到れば愛国を売物にし、民主主義を楯として、その裏にかくれ乍ら、最も恐るべき彈圧政治が行われ得るのである。

こうしたことをハッキリと目に物見せるが如くに示したのが一九四二年春の日系人の太平洋沿岸一斉立ち退きであり、一九四三年度夏のデトロイト市に於る白黒人の人権斗争であった。それ以来米国の社会の凡ゆる層の識者達が人権問題を真剣にとり上げ、殊に教育者達はこの角度から「学校と社会」の問題を考え直させられているわけである。

右の一例によつても、学校と社会とは相互に分離孤立してはあり得ないものであること明らかであろう。またその相互に不可分離なるものを無理に分離して考え、存立せしめて行くこととして来たことが如何にまちがっていたかは論を俟たないであろう。教育者達はそこに気がつくと直ちにその改善に努力しはじめた。一つには教育学そのものの領域内に於て之まで議論の余地ない自明の真理として考えられていた「性来の個性」ということの反省をし、之を近代の社

会学や心理学、人類学や生理学、その他凡ゆる分野の専門的な知識を綜合して研究し直したのであるが、その結果、所謂「性來の個性」なるものも多分に社會の伝統や環境の感化によるものであることがハッキリとして來たし、従つて所謂「個性を伸ばす」ということも「兒童の好みにまかせてささおけばいい」ものではなく、やはり色々な意味でディッシプリンされなければならぬものであるということが認められるようになって來たのである。

同時に又教育界の外部から政治科学者、社會学者、人類学者、精神分析学派の心理学者、その他人間を人間として綜合的に研究する人文学者達が、先述したような否定し得ざる結果から逆に從來の學校教育を批判し、色々な新しい洞察と見識とを以て、教育学者を応援することとなつたのである。このようなわけで毎年夏の休暇には全國の重立つた大學では、既に小学校や高等學校の教師として長年奉職している先生達の爲に短期の講習を設け、新時代のもたらす新しい問題に直面し之を克服する實力をおさめさせようとしてゐるのである。その場合講習科目をにぎわす講座は多く、如何にして生徒達を社會人として円満な人物たらしめることが出来るかというようなこと、殊に學童と人權問題、地方政治、男女の交際、結婚への準備、國際問題等を取り扱うものが多いようである。

ということとは近代の學校教育が単に社會人としての常識を植えつけるだけのものとなりつつあるというのではない。余りにも専門的な知識や技術を修得することにのみ念を入れ過ぎた結果、或一つの

分野では博士号を持った専門家であり乍ら、社會人として自分の町や村の政治をはじめ、世界の動きなどについては全く定見を持たず従つて惡辣非道な連中の巧みな言辞に弄されて、つい心にもなく黒人排斥や國連反對などのバンド・ワゴンに載つてしまふという悲劇が余りにも度重なる現狀に鑑みて從來の行き方は反省を強いられることになつたまのでのことである。

所が茲にまた笑うに笑えない悲喜劇が起るのである。即ち右に述べたように真剣なる反省と研究とを以て教育者が態々學校教育を改良しようとする、父兄側から思いもかけない反對の聲が上つて來る。「我々の時代には學校は読み書き算術を教わる所だつた。我々の子供達もそれ以外には何も余計なことを習わなくてもよい筈だ」と言うのである。こういう議論を吐くことそれ自体が從來の教育の欠陥を最も雄弁に物語つてゐるのであるが、御本人達はそれを反省する能力さえも持ち合せないかの如き有様である。悲しいことはそういう人達が父兄として又都民として學校の経営に相當の權力を持つておるといふことである。このような頑迷固陋の徒輩の爲に教育界の先覺者がどれだけその職を失つたかわからない。茲にも亦「學校と社會」の問題の極めて切実な一面を見るのである。

嘗てアメリカの公立學校が軌道に乗り初めた頃「學校中心スクールの中心の社會」ということが言われたものであるが、最近では「社會中心ソサエティ中心の學校」ということがしきりに言われているようである。それは學校が単に社會の奴隸となるというのではない。その意味する所は學校は唯

に児童中心で、児童の個性を尊重するのみでなく、その個性を形成する社会をも問題とし、又学校そのものの在り方行き方をも支配してやまない社会と、やがてその社会を動かすべき地位につく「明日の市民」としての学童の社会に対する認識と理解とを深めるということ、更に学童は学童として夫々の町や村の住民一般と、相互関係に於て生きているものである以上、労資対立から発展する階級問題住宅や就職の問題に不可分離の關係を持つ人権問題などから、階離された存在ではあり得ない。こうした複雑な社会状況のもとに成長しつつある学童を教育するにはどうしても社会そのものを考慮に入れずにはおれないのである。「社会中心の学校」ということが言われる所以である。

次回には同じ観点から特にP・T・A（父兄教師会）のことについて聊か述べてみよう。

（筆者は一九三七年立教大学卒業、後渡米、ニューヨーク及びシカゴ大学神学部に学び、一九四二年太平洋戦争と共に、軟禁された。在米邦人の生活向上のために、聖公会牧師として努力した。一九四九年ミネアポリス市日米センターの牧師として、此の間市長諮問委員会の人間関係調整委員長として人種問題の解決のために貢献する所大きく、当地の日本人は勿論、ニグロ、アメリカインディアン、などから大きな尊敬を払われている。）

新 刊 御 案 内



倉橋惣三著
子供讃歌
B六三四頁 定価二六〇円 千二四

内山憲尙著
インドのお話集

あわてうさぎ
A五一七六頁 定価二二〇円 千二四

村上幸雄編

幼児劇集 **はるのひよこ**
A五一七六頁 定価二二〇円 千二四

長田 新著

フレールベルに還れ
B六一九四頁 定価二〇〇円 千一六

落合聰三郎・周郷博編

幼児劇集 **たのしい劇あそび**
A五三三六頁 定価二八〇円 千三二



株式会社

フレールベル館

東京都千代田区神田小川町2ノ5 電話東京(29)7781~7785 振替東京19640